

全学共通教育についての自己点検・評価報告書（教育部会用）

教育部会名：農学教育部会

部会長名：金地 通生

作成者名：金地 通生

概要（2000字）

農学教育部会が提供する「食と健康」「生物資源と農業」は「生命と環境」の分野に分類される理系基礎教養科目に該当し、特に近年は地球全体レベルでの広い視野が求められる環境問題、生物資源問題、食糧問題、食育を通じた健康問題への幅広い理解と取り組みを提起する授業内容である。農学は元来、専門性の高い応用科学であり、社会分野と科学分野の基礎学問を十分に修得した上で成り立つものである。しかし昨今の急進的な環境問題、生物資源問題、食糧問題、健康問題のグローバルな展開は、一般教養としての農学教育の必要性を増大させている。そこでこれらの理解を進めるための農学的基礎学力を文系学生・理系学生を問わず補充する目的で、「食と健康（前期の木曜1限と後期の火曜2限）」「生物資源と農業（後期の月曜1限と木曜1限）」が重要な教養原論科目として設定されている。

「環境」を維持した「食料」の生産、日々の食物が人の「健康」を支配している事実の事例を多くあげながら、部会構成員70名の内4～5人の教員/1コマ（約20名/4コマ/年間）のオムニバス形式で講述した。過去3年間での受講生はいずれも大教室収容上限人数の200名/1コマで、それぞれ90%、46%が文系学生で、生物学や化学の知識が乏しい学生が多い。そこで講義では、人にとって食料の確保はもっとも重要な課題であり、食料生産は時代をこえて必須であることを説明して学生たちの興味を引いた。両科目とも学生の出席状況、受講態度、理解度は概ね良好であった。学生の授業評価から判断して、いずれの科目も教育の成果と効果があったと考えられる。健康、食料、環境問題、食の安全性などに関心が高いことが授業評価にも反映していると推察される。

また、講義内容の専門性の幅広さをカバーするために、非常勤講師3名/年間（任用経費計 ¥143,000）を任用しており、更なる経費節減と常勤部会員数を考えると、今後は常勤講師でカバーできる講義内容への変更も考慮すべき課題である。また、科目講義内容のすり合わせやコマ数については、これまで定期的な部会総会を開いて議論を十分に行ってきたとはいえないことより、少なくとも年次毎でのFD集会を取り入れた定期総会開催の場で部会員相互による教育体制充実のための取り組みが必要であると考えられる。

「食と健康」での一番の課題は、対象学生の所属学部が多岐に亘るため、その興味も様々なことにある。従って、すべての学生の学習意欲を満足させ、且つ、講義到達目標を達成するのは難しい。その点、様々な話題を提供できるオムニバス講義は、このような教養原論においては、かえって利点となっているのかもしれない。その反面、「食と健康」「生物資源と農業」各科目2コマの授業間で講義内容のバランスや整合性をとるのが難しくなっている。すなわち、同科目名の講義でありながら、内容が若干異なることがある。講義の公平性から考えても、今後は同科目2コマともある程度の内容の統一性を保証する必要があるように思われる。例えば「食と健康」では、食品一般・動物性食品・植物性食品・微生物・安全性（農薬）などの5つのカテゴリー、「生物資源と農業」では、栽培植物の多様性とその利用・栽培環境・農業と生態系・農業と文化・動植物遺伝資源などの5つのカテゴリーをそれぞれに決め、各2コマともにそれぞれのカテゴリーから1ユニット講義（3コマ）を担当するなどの配慮が必要と思われる。

毎回の小テストは評価と出席だけでなく、学生の理解度をその都度知ることができる点で有用である。しかし、「食と健康」、「生物資源と農業」の両授業での履修者数は講義室収容上限人数の200名ほどで、講義中に人数を確認して配布するのは、講義を行

っている教員には不可能で、TAの協力がどうしても必要になる。講義開始後20分で座席ごとに人数を確認して配布する方法で行ったところ、学生が真剣に講義を聴くようになり、真摯に講義の内容を考えるようになった。しかし、TAの配属が予算的に窮屈になってきたことで(¥36,000/TA4名/年間)、小テスト用紙を厳密に配れなかったときには、出席代書が後を絶たない。講義は聞くことに意義があり、単位を取ることが目的ではないという本質を学生たちに十分に理解させることが今後の大きな課題である。

様式2 (続き)

項目・観点ごとの記述

基準5 教育内容及び方法

5-1-②: 授業の内容が、全体として教育課程の編成の趣旨に沿ったものになっているか。【はい】
(観点に係る状況)

入学年に学ぶ教養原論では社会科学や自然科学の基礎教養を広範囲に正しく理解して一般教養を高めることが重要で、「生物資源と農業」「食と健康」では人の生命や環境維持に係わる食(植)物資源の基礎科学を文系・理系学生を問わず理解させられる内容である。

根拠資料

シラバス, 毎講義回に配布するプリント資料, 毎講義回に行った小テストでの学生からの回答やコメント

5-1-③: 授業の内容が、全体として教育の目的を達成するための基礎となる研究の成果を反映したものとなっているか。【はい】
(観点に係る状況)

医食同源に基づく機能性食品や発酵食品など食生活を通じた栄養・健康科学, 食の安全・安心科学の最先端研究事情, 遺伝資源のゲノム解析, 新品種改良や遺伝子組換え植物における安全性, 資源・環境保護におけるグローバルな最新研究事情を内容とする講義である。

根拠資料

シラバス, 毎講義回に配布するプリント資料

5-1-⑤: 単位の実質化への配慮がなされているか。【はい】
(観点に係る状況)

毎講義回での受講時の内容理解度やノート作成の完成度を確保するための小テストやレポート提出を課し, 成績の優劣化を明確に評価している。

根拠資料

シラバス (課題指示), 毎講義回の小テスト (遅刻状況に応じた減点)

5-2-①: 教育の目的に照らして, 講義, 演習, 実験, 実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり, それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法の工夫がなされているか。(例えば, 少人数授業, 対話・討論型授業, フィールド型授業, 多様なメディアを高度に利用した授業, 情報機器の活用, TAの活用が考えられる。)【いいえ】
(観点に係る状況)

高校までの教科書中心の机上授業になれて実際に想像する能力の不十分さを補うため, 実写映像を見せたり, 実物をさわらせたりする工夫はみられたものの, 大人数に対する講

義なので十分に行われたとはいえない。

根拠資料

説明用パワーポイントにおける動画や画像の活用，実際の研究用器具や植物資源を材料とする身近な製品実物の回覧

5-2-③： 自主学習への配慮，基礎学力不足の学生への配慮等が組織的に行われているか。【はい】

(観点に係る状況)

毎講義回での小テストに質問やコメントを書かせ，次回の講義で回答して理解不足を補っている。小レポート課題を課して自主的な調査や情報収集を行わせ，広範囲で多面的な理解のための自主学習を喚起している。

根拠資料

毎講義回に行っている小テストへの模範解答や質問・コメントなどへの回答，小レポート課題提出（講義外での自己学習の誘起）

5-3-②： 成績評価基準に従って，成績評価，単位認定が適切に実施されているか。【はい】

(観点に係る状況)

毎講義回での小テストを行い，公平に採点し，講師間での統一基準評価に基づく出席点と遅刻減点を考慮した平均点を評点としている。

根拠資料

毎講義回に行っている小テスト答案

基準6 教育の成果

6-1-③： 授業評価等，学生からの意見聴取の結果から判断して，教育の成果や効果が上がっているか。【どちらとも言えない】

(観点に係る状況)

学生のコメント（目から鱗が落ちた，面白かったなどのコメントがある一方で難しかったとの声もある）。特に受験科目で理科を選択していない文系学生からは内容の理解以前に専門用語の解説を求める意見も少なくなく，理科教育バックグラウンドの充実を補う工夫が必要である。

根拠資料

毎講義回に行っている小テスト答案中のコメント

基準7 学生支援等

7-1-②： 学習相談，助言（例えば，オフィスアワーの設定，電子メールの活用，担任制等が考えられる。）が適切に行われているか。【いいえ】

(観点に係る状況)

オフィスアワーやメールアドレスの紹介は行っているが，受講者が他部局学生であることより，教員研究室を訪ねてまでの相談を求める学生はほとんどいない。部局間の移動の不便さを考えると，メールを通じたやり取りを十分に行う方法が望ましい。

根拠資料

メールを通じた質問や相談記録